

西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔（上）

—金閣寺境内における所在について—

東 洋一

1. はじめに

筆者は、特別史跡特別名勝・鹿苑寺（金閣寺）境内・第6次調査（1997年）において、現庫裏東方約50m・現石不動堂南約100m付近で小規模な発掘調査を行った。この調査で鎌倉時代の池状遺構を検出した。以前の調査および現状地の地形・伝承・従来の学説等を検討した結果、今回検出した遺構は藤原定家の日記『明月記』に記された西園寺「瑠璃池」の一部である可能性があり、さらに検出池北方高台に位置する石不動堂北側の窪みが『明月記』にいう「四十五尺瀑布瀧」に比定できる可能性が高いと考えるに至った。この仮説はすでに『平成九年度京都市埋蔵文化財発掘調査概要』（1999年）に附論として報告したが、紙数の制限もあり重複する部分も多いが、この場を借りて自説を展開したいと考えた。

また、足利義満によって建立された北山七重大塔の所在地は従来から不明であったが、鹿苑寺作成200分の1地図の等高線上に表れた方形土盛に、第3次調査（1990年度）W4区西半分で検出した「集石遺構」と、同西北部で検出した義満時代の大量の大型瓦出土地「池跡28」をトレースすることによって、それに比定できる可能性がないかを仮説として取り上げてみたものである。尚、北山七重大塔については（下）として次号に掲載する。

以上の仮説は『特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』（前田義明氏、1997年。以下『報告書』とする）の成果を踏まえて行った。（図1参照、『報告書』7頁より一部加筆）

2. 西園寺四十五尺瀑布瀧

人もいさこよひの月をみくまのの

浦のはまゆふ雪をかさねて

（参議左近権中将藤原公経『熊野御幸略記』収録、東京大学史料編纂所写本）

「十四日、遙漢快霄、巳時許中将相供向北山、見勝地景趣、禮新佛尊容、每事以今案被營作、每物珍重、四十五尺瀑布瀧碧、瑠璃池水、又泉石之清澄、實無比類、未時許歸廬」

（藤原定家『明月記』元仁二年正月十四日）

遺構の概要

池跡を検出した各トレンチの詳細な内容は『平成九年度概要』を参照されたいが、叙述に先立って、最小限の説明は付け加えておきたい（図2参照）。

第6次調査、つまり莊嚴院移築予定地内に、以前の調査とは別にF・G・H・I区を設定した。東西1.5m、南北8mのG区を庫裏東方50m付近、莊嚴院建設予定地東側に沿って設けたが、予定地の西・北部は現状の通路・ガレージ・納屋・植樹等により規制されたため、小規模トレンチ（F・H・I区）に分散設定せざるを得なかった。

出土遺物は室町時代の瓦・土師器と鎌倉時代の瓦である。その内、第2層とした整地土層から鎌倉時代の瓦に混じって義満時代の2点の北山殿所用小型軒平瓦が出土した。『報告書』にある「208B・208C」と同范である。また最下層の砂層からは8片の鎌倉時代の小型瓦が出土した。

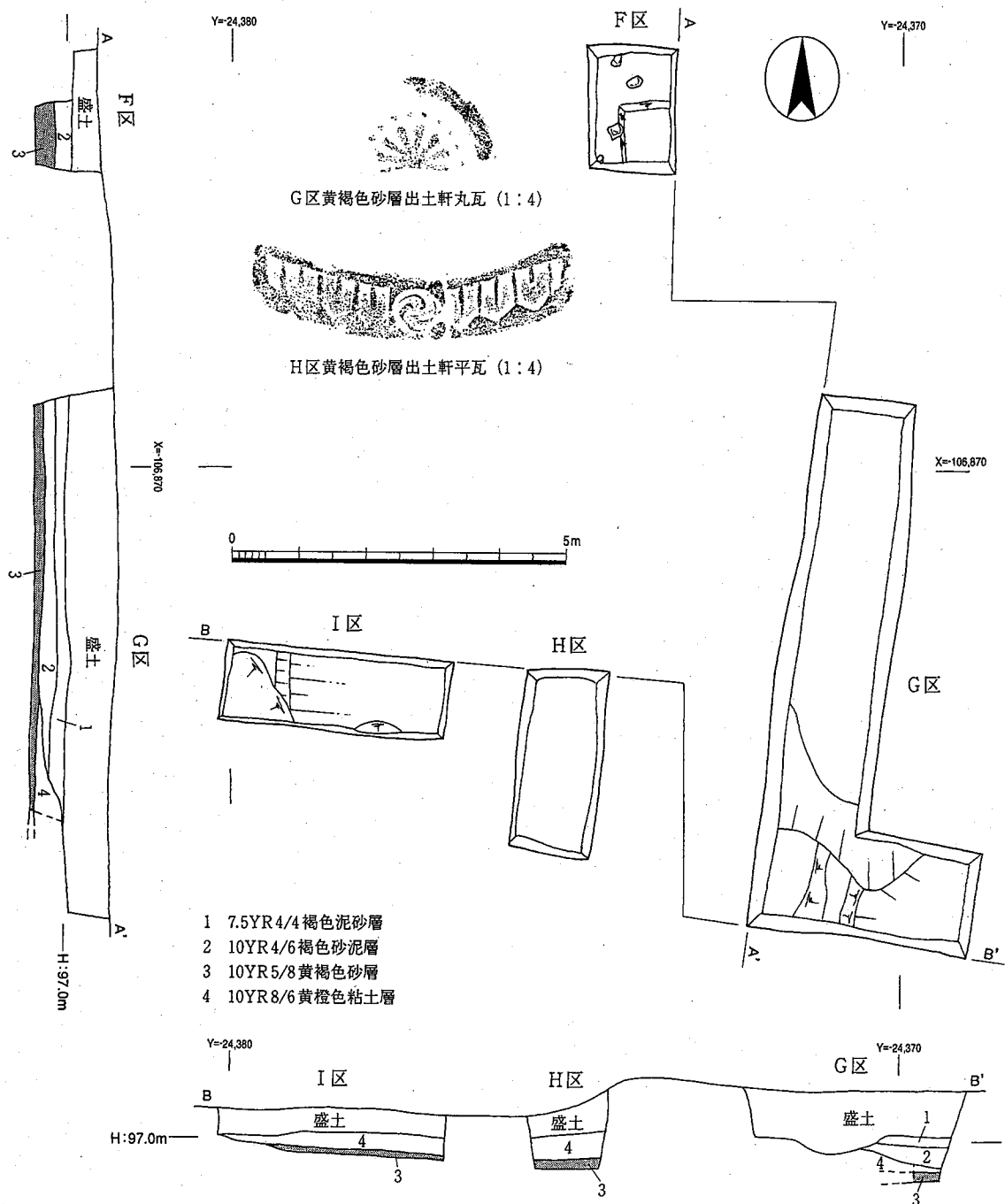


図2 第6次調査 F～I区遺構実測図

特にG区から珠文を廻らす12葉の菊花風紋の軒丸瓦1点、H区から瓦当面に布目が残り中心飾りに二ツ巴の両脇に下向剣頭紋3個半配するほぼ完形の折曲式軒平瓦1点を検出した。この2点は境内で初出土である。(図2参照)

最下層の砂層から鎌倉時代の瓦だけが出土し、義満時代の瓦は1点も検出していない。池底面を形成する地山面は平坦な堅い赤土の固まったような岩盤で、水漏れの心配はなく直接砂層に接する。この砂層は砂粒が均一で川砂と類似し、小石の混入はない。次に各トレンチの地山のレベルと砂層の厚さを示す(写真1)。

F区は標高96.55m、厚さ35cm。

G区は南端・北端ともに標高96.50mで水平である。しかし、拡張部東端は西端に比べ10cm低い標高96.40mで、緩やかな下降を示す。また北端と拡張部東端の厚さは各々15cmであるのに対し、トレンチ西壁南端では8cmで薄く、北と東が相対的に厚い。

H区は標高96.60mでG区拡張部東端より30cm高く、厚さは10cmである。

I区は東端が標高96.70m、厚さ10cmであるが、西端から東80cm・標高96.90mで砂層が途切れ、地山と整地層とが直接接する。

なお、I区西端の地山レベルは標高97mで、I区東端より30cmも西上がりになり、第1次調査(1988年度)C区「庫裏東側の畑地」の地山標高97.20mに繋がるものと考えられる。この砂層の始まりからG区拡張部東端まで勾配17度でなだらかに下がり、砂層が途切れる様子はない。約12m間で50cmの高低差がある。しかし、南北間のF区北端からG区南端までの約13m間では、F区がG区に比べ5cm高いだけある。

この池跡の範囲を示すものとして『報告書』で「W2区では調査区東半部で、池状遺構を検出した。池の西岸にあたると思われ、西から東へゆるやかに落ちる肩部に、玉石を敷き洲浜を形成している。玉石は石英の磨滅した白色の石を用いていた。池の底部には白色の粘土を貼っているが、池の堆積を示すような腐植土層はみられなかった。」(9頁)と報告された「池の西岸」も今回検出した池跡の一部と考えられる(図3参照・写真2)。また、その池の東端は「W2区の東端部およびW3区とW4区の西部では池の下層より、平安時代中期から後期のピットと包含層を検出した。…W2区から続く池状遺構の東端は、堆積状況からみてW4区の西半部にあたるが、肩部が現代溝に攪乱されている。」(同頁)ために明らかにすることができない。

今回の調査では第2次調査で修羅が出土した「池跡27」に堆積していた腐植土を検出していない。堆積層が砂であることを考えれば単純に溝か川に比定するのが妥当であるが、I区西端より東に向かってなだかな下降が生じ砂層が13m以上も続き途切れる様子はなく、また、これらのトレンチ北東20m付近、第3次調査W2区東半部で検出した白玉石を敷いた洲浜状遺構等の広がり等を考併せれば、池の流れの一部である、または幅の広い瀬の堆積と理解すべきであろう。

今回の調査では「W2区」で検出した洲浜の玉石や白色の粘土貼りは検出していないが、今回のI区西半で西端汀を検出したことになり、そこから40m北で検出したW1区東半部の東へのなだかな「落ち込み」(図3参照)も北西汀の可能性が出てきた。

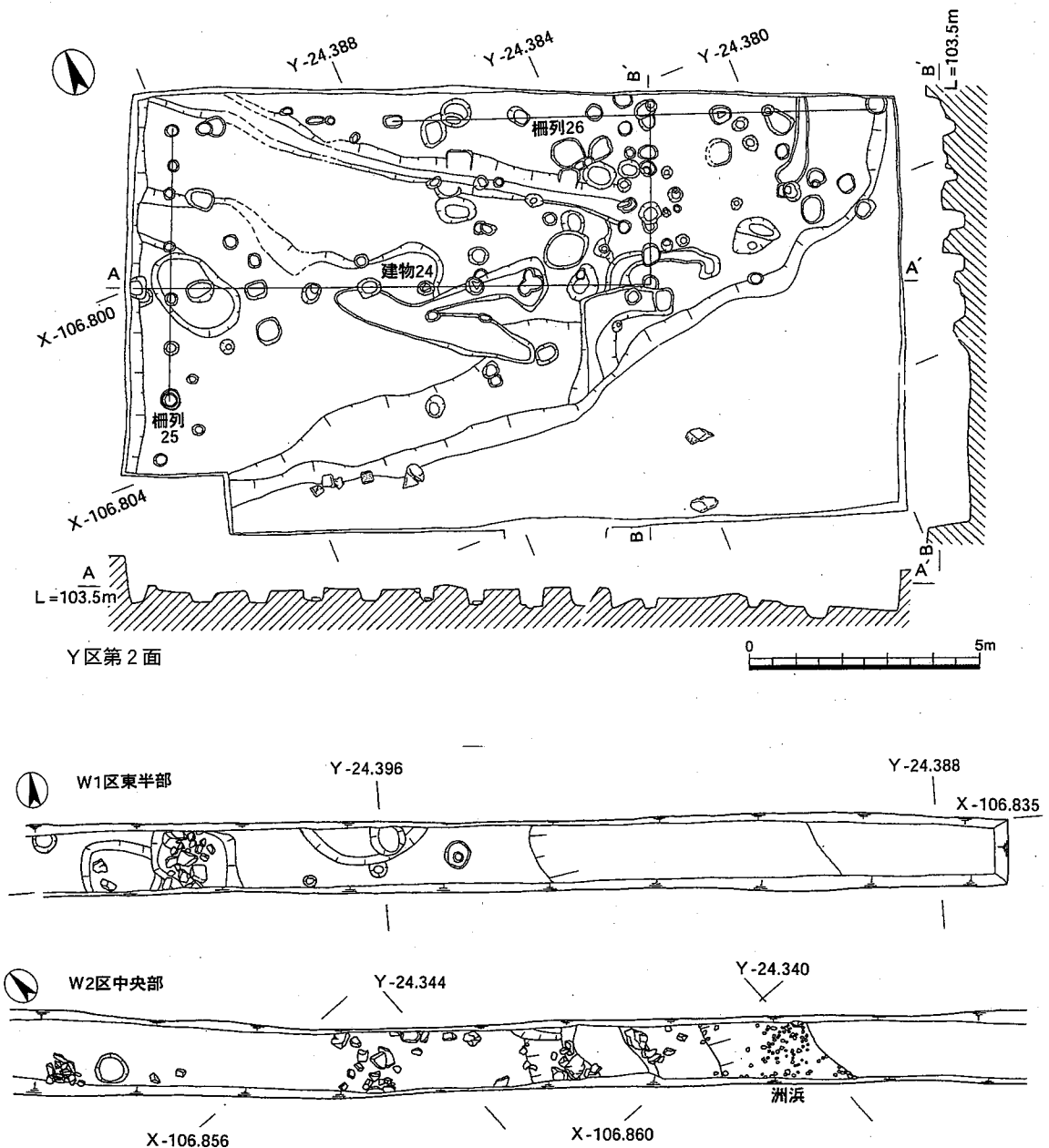


図3 Y・W区遺構実測図

3. 文献に表れた西園寺北山第における池と瀧

これを池跡とすれば、従来諸説あった西園寺時代の瀧についての一つの推論が得られるので、ここで展開してみたい。

北から都を眺望できる好立地条件に位置する、将軍義満によって造営された北山殿は彼の死後、将軍職を継いだ義持によって父の菩提寺として鹿苑寺と改められ今日に及んでいる。この北山殿の敷地は建武新政発足による鎌倉幕府瓦解後、北条方と目されていた西園寺公宗の処刑により、家運は傾き、邸内が荒れ果てていた西園寺家から義満が庄園と交換に譲り受けたものであり、従来は西園寺または北山第と呼ばれていた。この西園寺北山第は後鳥羽上皇の承久の乱後、皇室・幕府との姻戚関係を利用して官位・家格も急速に上がった藤原公経が元仁元年（1224年）、北山

の地に西園寺を落慶供養したことに始まり、それ以来、彼の一族は西園寺を名乗った。北山第は、幕府瓦解に至るまで関東申次の要職を歴任する摂関家を凌ぐ権力と栄華を誇った西園寺家の菩提寺・邸宅（公経当初は別業）であり、院・六波羅と並ぶ都の政界における求心地の一つであった。

しかし残念なことに莊嚴を誇るとされる西園寺時代の建物群は一字たりとも現存せず、以前の発掘調査においても瓦を主とする遺物が散発的に出土しても、それに伴う確実な遺構は不明なままであり（『報告書』71頁）、当時の様相は幾つかの残された文献から復元するしかなかった。その中でも当時の景観と建物を最も詳しく叙述したとされる『増鏡』の「内野の雪」に次のように記されている。

「公経のおほきおとと、其かみ夢みたまへることありて、源氏の中将わらはやみなじない給し、北山のほとりに、世にしらすゆゆしき御堂を建てて、名を西園寺といふめり、もとは田畑なとおほくて、ひたふるに在る中めきたりしを、さらにうちかへし、くつして、えんなるそのにつくりなし、山のたたすまる、こふかく、池の心ゆたかに、わたつ海をたたへ、嶺よりおつる瀧のひひきも、けに涙もよほしぬへく、心はせふかき所のさまなり。本堂は西園寺、本尊の如来まことにたへなる御すかた、生身もかくやと、いつくしうあらはされ給へり、又せむしやく院は薬師、功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、たきのもとには不動尊、このふとうは、つの國より生身の明王、みのかさうちたてまつりて、さしあゆみておはしたりき。その簀笠は寶藏にこめて、三十三年に一といたさるとそうけ給る。石橋の上には五たい堂、成就心院と云は、愛染王の座さまさぬ秘法とりおこなはせらる。又ほす院・けす院・無量光院とかやとて、来迎のけしき、彌陀如来廿五のほさつ、こくうに現し給へる御すかたも侍めり。北の寝殿にそ、おととは住み給。」

また、早くも西園寺落慶供養の次の年、元仁二年（1225）正月十四日に訪れた藤原定家（公経は定家の義弟）も『明月記』において、その感嘆した有様を日記に記したことはあまりにも有名である。

「見勝地景趣、禮新佛尊容、每事以今案被營作、每物珍重、四十五尺瀑布瀧碧、瑠璃池水、又泉石之清澄、實無比類、」

この定家の云う「四十五尺瀑布瀧」は、日本文学に絶大な影響を与えた白居易（711～876）即ち白楽天の、道教・天台宗・禅宗の聖地である中国天台山にある四十五尺の瀧を「念女工之勞也」の絹に見立てた漢詩「繚綾」を踏襲している。それは『漢書』卷二四食貨志にあるように、四十五尺は絹製品の長さの単位をなし、一日一尺が女工達のノルマで、それに掛けた白氏特有の文学的表現である。

應天台山 上名月前 四十五尺瀑布泉

聖地天台山の四十五尺の瀧は『石梁瀑布』に比定でき、大正年間の関野貞による現地調査によれば「高さ五丈許の大瀑布、懸崖より落下せる處、・（中略）・橋は自然の巖石より成り、長さ役三十尺、厚さ約二間、而も其の上の廣さ尺に盈たぬ」（常盤大定・関野貞『中国文化史跡・解

説・上』1975年復刻版。写真を載せられないのが残念である）とあるものがそれである。重源・栄西を挙げるまでもなく、その瀧に懸かった石橋を渡ることは、入宋求法僧にとって垂涎の的であり、従ってまた、白氏の漢詩同様、天台『石梁瀑布』のことは当時の僧侶・公家達は当然のごとく聞き及んで熟知しており（藤原兼実『玉葉』寿永二年（1183）正月二月四日等）、栄西とも法勝寺八角九重塔再建に際して関係があり、仏会も天台・念仏に倣った公教もそれを念頭に置いて作庭したものと思われる。和歌所寄人であった定家は『詠哥之大概』において「時節景気世間之盛衰 為レ知ニ物由一 白氏文集第一第二帙常可ニ握翫一 深通ニ和歌之心一」と和歌の大意を述べており、白氏のこの漢詩を知っていたものは確実であるが、その本意は宮廷の奢侈に対する諫言である。

織者何人衣者誰 越溪寒女漢宮姫・（中略）・絲細繰多女手疼 扎扎千聲不盈尺

諸説乱立

西園寺について述べられた、この二つの文献に残された僅かな叙述から、滝と池を共通要素として抽出でき、これを必要条件とした西園寺時代の景観復元がいくつか試みられている。

例えば『鹿苑』（1955年）の寺史を担当された赤松俊秀氏は「瀧の位置もおのずから推測される。池は金閣前の鏡湖池である。」（『金閣と銀閣』1964年）とし、1935年に『名勝調査報告第二輯・金閣寺（鹿苑寺）庭園』を報告された吉永義信氏も「西園寺時代は、上の安民沢から龍門瀑の辺りまで、四十五尺もの瀑布の滝であったという。現代の龍門瀑は義満時代のもの」（『日本の庭園美・鹿苑寺金閣』1989年、67頁）とされた。また近年、金閣の新たな復元案を提示された宮上茂隆氏も「現在金閣の前に広がる『鏡湖池』、北の一段高い地形にある池『安民沢』、そこから落ちる滝『龍門瀑』など、このとき（西園寺時代、引用者）すでに存在したとみられる。」（『日本名建築写真選集・金閣寺・銀閣寺』1992年、92頁）とする。確かに、必要条件を満たすものは、現状では金閣南面に広がる鏡湖池と金閣北方にある段差を利用した龍門瀑しかない。しかし、この滝は八尺（2.5m）程度しかなく、しかも論者によって龍門瀑の製作期もさまざまである。

このことから庭園史家の第一人者である重森完途氏が『名月記』には、四十五尺瀑布瀧碧瑠璃池水とあって、ちょっと計算が合わないように思えるが、これは、この滝は、上部の沢から一応落ちて、流れとなり、そして、この滝石組となっているので、上部の沢からの全長をいっているのである。…鎌倉中期の滝石組の強さがよくでており、天竜寺庭園の滝石組と共に、実にみごとなものである。」（『増訂・京都の名庭』1965年、48頁）とされ、長さのことを定家が述べたのだと解釈された。これらの解釈にしたがって「四十五尺瀑布瀧」を、法性寺殿の滝が『名月記』（正治三年九月十八日、1201年）によれば「十五尺」（4.5m）であり、現存する法金剛院の滝石組でも高々5mである以上、四～五尺の書き間違いであろうとする俗説まで生み出した（西沢文隆『庭園論Ⅰ』1975年201頁）。従って、『明月記』にある「四十五尺瀑布瀧」（13.5m）の値が正しいとするならば、現存する安民沢と鏡湖池に固執する限り現地地形から見て重森説以外に必要な十分条件を満たさないことになる。

しかしながら、一見妥当に見える重森説が論理的な弱点を持っていることは、公経の子実氏時代に現在の禅宗様の竜門瀑に作りかえられたとする、渡来禅僧「蘭溪道隆改変説」を唱えられた大山平四郎氏の批判によって明らかである。すなわち「そこで様式派（重森氏のこと。引用者）は、四十五尺の滝という《明月記》の記録を、滝の落差でもなければ全長でもなく、水源から水落石までの距離であると、苦しまぎれの解釈を主張する。しかし、水源の安民沢から水落石までの実際上の距離は約百尺（約30m）もある。したがって様式派の『水源から滝口までの距離説』は、見えすいた虚構にすぎない。」（『日本庭園史新論』1987年、66頁）と述べているのは彼の説の成否は別にしても、この件に関しては妥当であると考え。ちなみに、大山説によれば正しくも「形態学的研究法」によらなければならないとするが、改変される前の「西園寺山荘に築かれた全長四十五尺の滝は当時として非常に珍しく、類例も少なかったと推定する。その形状というのは、例えば遊園地などにある滑り台と、階段と組み合わせたような格好である。西園寺北山第の滝は、このように垂直な低い水落石と水落石と斜面とつなぎ合わせた全長四十五尺（約十四m）に及ぶ独特な滝であったと推定する。このような小滝と岩走る早瀬を連ねた混合式の遺構が、京都山科の勧修寺にある。全長は十二、五m（約四十一尺）であり、北山第の滝よりも約一、五m短いだけであるため、勧修寺の滝を見ることによって、およそ想像がつく。」（前掲書64頁）というもので、彼の批判する様式派と大差のないものとなっている。しかも勧修寺の滝との比較だけで、推測の域を出ていないのである。

詳しい点は省くが、大山氏は注目すべき論点を提出している。すなわち「様式派は、金閣寺に現存する竜門瀑を、作庭記流であると解釈するだけでなく、金閣寺のすべての石組もまた作庭記流であると誤信する。日本庭園史上最大の変動期であり、それ故にまた複雑な情勢でもある鎌倉期の理論がこのように解釈されているため、結局50年間も日本の庭園史学は進歩しなかった。」（前掲書88頁）

久恒説と発掘成果

ところで、第2次調査N・M・I区で腐植土に覆われた修羅2基が発見された「池跡27」と、その北東J区で「石組17」を検出している。これを滝跡とするならば1947年当時、京都府知事委託として金閣寺境内の整備に当たられた久恒秀治氏の説が妥当な説となってくる。すなわち、彼は西園寺時代の庭園と建物配置を考察した「鹿苑寺の庭」の中で『増鏡』、「第十、老のなみ」にある弘安八年（1285）「北山准后九十の賀」に際しての御深草、亀山の北山御幸の記事から

「中島に御船さしとめて見れば、舊苔ふりたる松が枝さしかはせる。岩のたゞずまゐいとくらがりたるに。池の水なみ心のどこかに見えて、名もしらぬ小鳥どもみだれとおぶけしきになとなくおかし。とをきさかいにのぞめる心ちにするに。めぐれる山のたきつ岩ね。はるかにかすみて見出さるゝ程。仙人の洞もかくやとぞおぼゆる。」を引いた上で「今の鏡湖池で最大の中島は『葦原島』であるが、これは細長く、明るい。老松が鬱然として岩組が暗くなる中島という、厚みのある相当大きな島でなければならない。これで葦原島が鎌倉時代の島ではなく、義満時代

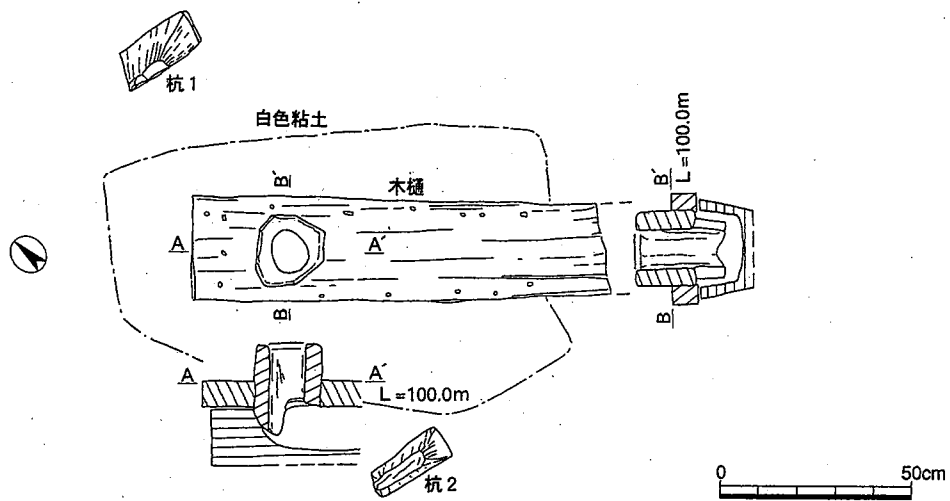
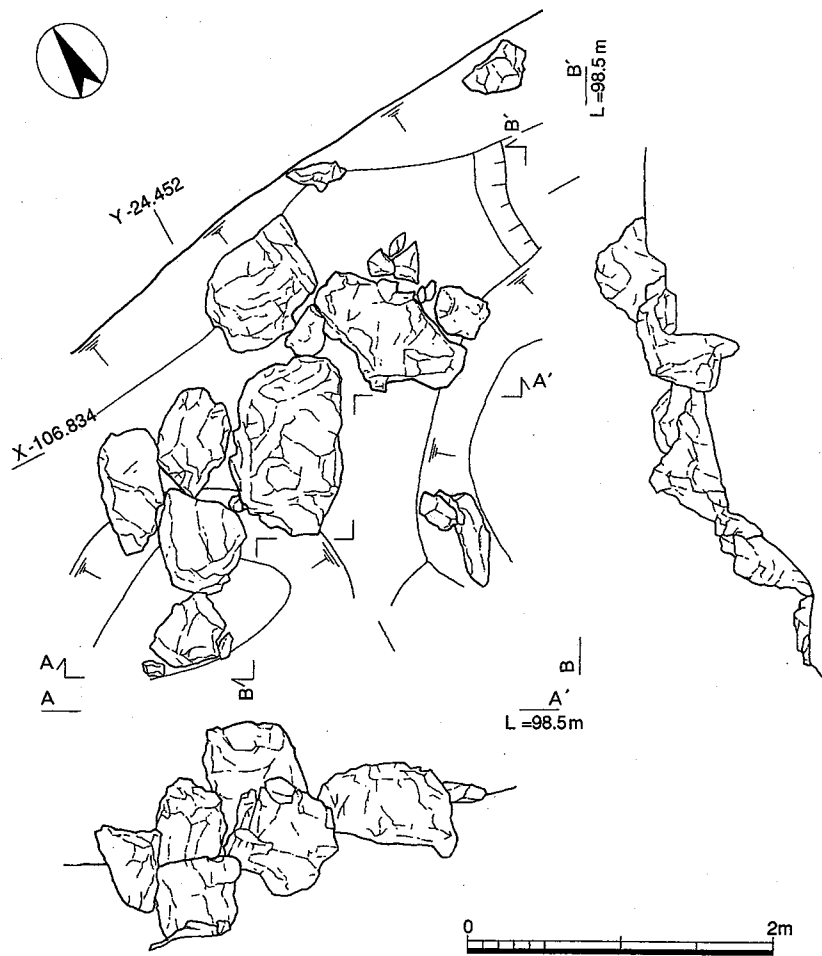


図4 J区石組17実測図（上）、安民沢木樋16実測図（下）

の築造であることが明らかとなる。この明確な岩組により、他の庭園部分の、制作年代の類推に役立つ。また、船上の、低い視線から滝が見えたことは鎌倉時代の滝が石不動の辺りにあったのではなく、やはりこの鏡湖池の前身である大池に近く落ちていたものと思われる。また、滝は安民沢のような貯水池がなくては常時水を落とすことはむづかしい。西園寺時代の四十五尺の『布

落ち』の滝は今の竜門瀑ではなく、安民沢の東寄りの水門より、拱北楼の西南方、大書院の北方へ落ちていたと思われる。その滝の下に『不動堂』があり、滝落ちの流れを越える石橋を渡った西側の上に五大堂があった。」(『京都名園記・中巻』1968年、245頁)と想定された。ここで彼が「鎌倉時代の滝が石不動の辺りにあったのではなく」と述べているのは、後に述べるように金閣寺境内北東に位置する石不動堂の北側の崖が、滝であったという伝承があるからである。

この久恒説は発掘成果からみても魅力的なものである。というのも水源と滝と池と不動堂がセットになって考えられるからである。1993年度の安民沢の調査において安民沢南東隅から現在使われていない時期不明の「木樋16」(図4参照)を検出しており、それはそこから西30mの高所に位置する茶室・夕佳亭から南の現方丈に向かって30mほど舌状に延びる、鹿苑寺十境に数えられる土塁状の「縦目峰」(『山城名勝志』に「方丈北有峰號縦目峰勝景地也」とあるのがそれであろう)を通して、修羅を検出した「池跡27」の北東に位置するJ区で検出した「石組17」(図4参照)につながる可能性があるからである。なお、この名の通り「縦目峰」の存在が金閣寺境内の地割を東西真っ二つに縦目に分かつ岐峰になっており、その延長線上南に位置する方丈以西が表、庫裏以東が裏庭になっている。以上述べてきた論者はすべて表となる「縦目峰」の西側に位置する金閣・鏡湖池・安民沢の関係を論じているわけである。

その石組の高さは部分的に抜き取られていて正確な高さをわからないが、残存高さは約2mしかない。この石組は『報告書』にあるように縦目峰の「切り通し部分の西斜面で検出した石組である。切り通しの拡張工事の折、一部の石組は抜き取られてしまった。石はすべて縦に用い、南西から北東方向へ階段状になるように据えている。天端はいずれも平たく、西からみると滝組みのようにみえる。石組17の上部の土層は、溝状の遺構が認められ砂が含まれるが、はっきりとした遣水遺構は確認できなかった。さらに北方を調査する必要がある。石組の石材はチャートが主である。」(23～24頁)以上、時期は不明ながらも滝組であった可能性がある。(『報告書』72～73頁参照)

この石組みについては重森三玲・重森完途『日本庭園史体系・第四卷・鎌倉の庭(二)』(1974年)に収録された「鹿苑寺文献・資料」のうち『慶應四戊辰三月官廳ヨリ御改降命ニ付本山差出寫記冊』のなかの、恐らく元禄十六年(1703)に作成された『鹿苑寺由緒書』の写しであろうと思われる『鹿苑寺由緒訳書』の中で、鹿苑寺「十境」に選ばれている「縦目峰」の割注に、意味不明であるが「此所有者口主馬判官西之舊跡在日盛久岩石也」とあり、したがって、この石組がそれに該当する可能性もある。しかし西園寺時代の四十五尺の滝にしては低くすぎる。だからこそ、久恒氏は滝の場所は重森氏と異なりつつも重森説同様に「四十五尺の滝は一応誤りのようにも思われるが、『瀑布』とあり『布ざらし』ように幾段にも落とし、その総丈が七間半ということだと考えられる。現在の竜門瀑とその上の池である安民沢の間の溪流様の長さはほぼそれに近い。定家は決して誇大に記述したわけではない。」(前掲書231頁)と、少しあいまいな回答なされたのである。しかし、この回答に対する批判は、前記の大山氏の批判が等しく当てはまるであろう。

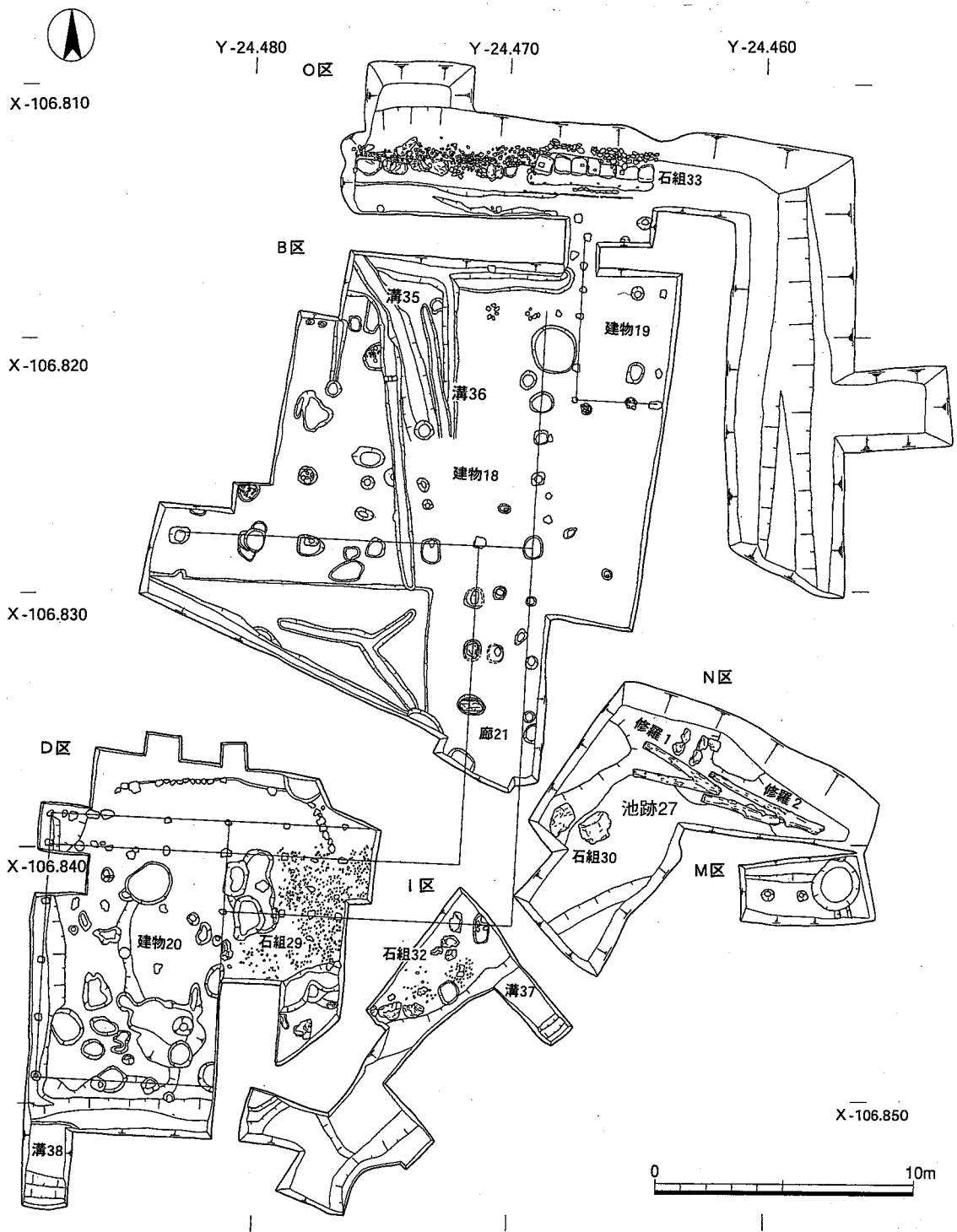


図5 B・D・M・N・O区遺構実測図

ただし、この「石組17」の北西15mで「建物19」を検出している。『報告書』で「建物19はもっとも奥まった箇所であり、北側と東側は切り立った崖面に近接している。建物18と比べ、礎石は小さく小規模な建物で、東西3.3m、南北6.5mの大きさで検出した。さらに建物19の周辺にもいくつか礎石がみられ、複雑な構造もち、また重複も考えられる。しかし小さな自然石を据えただけで、掘形を持たないため、礎石が抜き取られた痕跡を探すのは困難で、全貌を明らかにし得なかった。」(25頁)としたものも、久恒氏の言う不動堂の跡だったのかもしれない。(図5参

照)したがって、久恒説成立する可能性は十分にあると思う。

しかし、四十五尺を高さのことと解釈する限りにおいて、四十五尺の高低差は金閣周辺、すなわち「縦目峰」以西の安民沢と鏡湖池との間には存在しないのである。なぜならば、現在の安民沢の水位がほぼ標高101mであり景石や中島のあり方からして当初より変化がないと考えるならば、龍門瀑の水落付近が標高96mであり、滝の水源を安民沢に求める限り「縦目峰」を含めて、その差である5mを越えることが絶対に出来ないからである。因みに、鏡湖池の水位は現在95mである。したがって、金閣寺境内の中で13m以上の高低差を持つ場所が求められなければならないはずであるにもかかわらず、飛田範夫氏は『日本美術全集第11巻・禅宗寺院と庭園』（1993年）において「洛中洛外図屏風」に救いを求める。すなわち、「金閣の背後の林の奥には、鎌倉時代の作ともいわれる龍門瀑と呼ばれる滝組がある。ここには上方の池、安民沢からの水が落ちていて、山沿いを流れて鏡湖池へと流入している。ところが、室町時代から江戸時代初期にかけていくつも描かれた『洛中洛外図屏風』には、金閣の背後に落差が数十メートルもあるような大規模な滝がみられる。以前には別な流路があって、そこに、高低差を利用して大きな滝が設けられていたのではないかと考えられる。鎌倉時代の藤原定家が日記『明月記』の嘉禄元年（1225）正月十四日の条に書いている北山殿の『四十五尺の瀑布』というのは、この滝のことであろう。」（197頁）と述べておられるが、遠近法も確立していない時代の絵画のデフォルメに惑わされた解釈であろう。

というのも『洛中洛外図屏風』における金閣の描写が各屏風とも不正確であることは、すでに高橋康夫氏の『洛中洛外』（1988年）および奥平俊六氏の「金閣寺の遊楽」（『寛永文化のネットワーク・隔葉記の世界』1998年、収録）において論証されているが、飛田氏が絵画から導きだされた「金閣の背後に落差が数十メートルもあるような大規模な滝」は現状では痕跡すらなく、いったいだれがその高低差を現状の高低差に変更できたのかを問われなければならない。そのような大事業を行った人物は義満以降見当たらないし、また現実にはあり得ないことである。飛田説は物理的に不可能であるだけでなく、歴史的背景からしても肯定できない。もし仮に「高低差を利用して大きな滝が設けられていた」のであれば、高低差を利用できる場所でなければならないはずである。

西園寺に於ける滝と不動堂

以上、見てきた諸説のように四十五尺滝にこだわりすぎると、白氏や定家の文学的表現に拮据取られた虚構の世界にすぎないのだとも思えてくる。ところが今回、「縦目峰」以西の金閣周辺とはまったく逆方向の「縦目峰」以東、すなわち鏡湖池から東へ100m、方丈・庫裏から東へ50m付近の竹林が鬱蒼と生えている莊嚴院建築予定地で池跡を検出したのである。池跡であるならばその水源がどこかにはあるはずである。そこで水源となる北側に注目すれば、この池跡30m北方に露頭した巨岩を伴う崖が聳え立ち、その上に不動堂がある。

この不動堂について赤松俊秀氏は寺史『鹿苑』のなかで「当寺の不動堂は俗に石不動と呼ばれ

ているが、寺内にありながら、本坊とは独立して、住持が別にあった。西園寺時代から寺内にある生身の不動堂とは別の存在である。」(30頁)とされた。

しかし、この赤松説に対して石造美術の第一人者であった川勝政太郎氏が北山石不動を対象にした唯一の論文である「北山石不動とその信仰・上」(『史迹と美術・第290号』1959年)において、正徳元年(1711)の大島武好編になる『山城名勝志』に記載された「石不動堂」の項の「寺家説云」として、「又云昔ノ瀧ノ跡此堂後ニアリ」を引用した上で、不動堂の本尊たる砂岩製不動明王の細部様式を丹念に観察し、次のような反論を試みられた。

即ち「北山石不動像は、鎌倉初期を降らぬ古像であり、その製作は石仏には稀な本格的かつすぐれた彫刻であって、石造美術史上貴重な作例と言うべきものである。…足利義満の北山殿またはその後身たる鹿苑寺時代のものではなく、西園寺家の西園寺の遺像とするのが妥当であろうと思う。…私には『瀧のもとには不動尊』と言うのが、北山不動尊に相当するもののように思われ、引いてはこれが嘉禄造願の西園寺不動堂の本尊であろうという推定になるわけである。」(8頁)とされ、さらに「この不動堂が本坊とは独立して住持があるという特殊な在り方こそ、不動堂が西園寺時代以来のものであることを語るのではなからうかと思う。即ち義満の北山殿の後身たる鹿苑寺では、西園寺時代の石不動堂を別院にしたものではなからうか。江戸時代初期には『雍州府志』によると、『于今真言宗僧守之』とあって、真言宗の住職か堂守がいたのであるが、現代においても鹿苑寺境内でありながら、すべてを不動講社に委ねられているのも、そうした伝統によるものであろう。」(同、10頁)と赤松説の逆の解釈をされた。川勝氏が論拠とされた『山城名勝志』の「又云昔ノ瀧ノ跡此堂後ニアリ」という「寺家云」の言い伝えが正しいものとして仮定すれば、そして今日でも寺伝として「昔から滝跡と聞いてきた」という伝承が残っていることを勘案すれば、現石不動堂が西園寺時代に「瀧のもとには不動尊」があった所に再建されていると解釈することができ、基準点とすることができる。

『明月記』嘉禄元年(1225年)十月廿三日の条において定家は「北山不動・愛染王、奉造被安置(各有一堂)云々」と記録している。先に引用した『増鏡』の「滝のもとに不動尊」という記述と照らし合わせて見れば、今や、滝と池だけではなく不動堂との関係をセットにして考えなければならない。

中根説と四十五尺の滝

そうなってくると、この石不動堂北に位置する不動山の削り取られた崖を定家のいう「四十五尺瀑布瀧」であるとする京都府技師として、前述の久恒氏の後任として金閣寺庭園を根本修理された中根金作氏の説が浮上してくる。

中根氏は久恒氏と同じく通説を否定して「鹿苑寺庭園が西園寺家の北山第庭園を利用改造したものでなく、義満の時、池地割の一部は利用しても、島、石組、汀線は全く新たに独創のもとに造られたものであることは、昭和三十一年、筆者が鏡湖池の浚渫の際調査して明らかとなっている。」(『日本の庭』1964年、186~167頁)と述べておられることは重要である。さらに、中根氏

が亡くなられる直前に出版された『京都の庭と風土』（1991年、52～53頁）において「庭園は西園寺当時の池の大部分が利用されたと思われるが、義満の好みによって局部的にはほとんど新築に等しい改造がされたのではなかろうかと思われる。現在の鏡湖池や滝口の滝門瀑の様様から判断すると、そのようにいわざるを得ない。問題は公経が造営した当時の四十五尺の大滝である。」と問題を提起したうえで、四十五尺の大滝位置を次のように想定された。即ち「現在の鹿苑寺境内の滝口、滝門瀑から上、夕佳亭よりさらに東にある不動堂の北側に接して、坪のような小広場があり、この中央に獨鉈水と称する石組の井戸がある。この獨鉈水は後世の作であるが、井戸の北側は不動山の切り立ったような岩盤の崖がある。この岩の上部中央が少し、しゃくれたような窪みが付いている。この岩盤が四十五尺の大滝跡であろうと思われる。高さも丁度同じ程である。」とされたのである。

その根拠として中根氏は「昭和三十一年六月から十一月にかけて、私が鹿苑寺庭園の根本修理を行ったとき、鹿苑寺庭園周辺一円の調査を行った。その際、不動堂北側の滝口跡上部から北方に幅二尺程の溝跡が不動山山腹からさらに北方に続いているのを見付けて実測した。この溝跡は、滝口の岩盤上部の窪みから、不動山およびその後方の山々の山腹や山麓を通り、約二キロ北方の鷹峰山裾を流れる紙屋川の上流に至っていた。丁度光悦寺境内の西側対岸になる。このところに当時の川水取り口の跡が残っていた。」とされ、「鹿苑不動堂裏に残る西園寺当時の四十五尺の瀑布（大滝）の遺構」「鹿苑寺に残る西園寺庭園の大滝に引水した紙屋川上流の取入れ口」「紙屋川上流から延々と不動山にある大滝に向かって造られた水路の遺構」の3枚の写真を示されている。即ち、水源の問題から従来云われていた安民沢と鏡湖池の間ではなく、不動堂の北側に滝があったとするのである（図6参照・写真3）。

確かに密教の尊客たる不動明王は『作庭記』にあるように滝組と密接に関係がある。信仰上からも滝の石組を不動石と呼び、二童尊を引きつれた不動尊ということ強く意識していたので、なおさら不動堂が滝跡に建っていても不思議ではない。

中根氏の言われる不動山の滝跡は現在、図6を一瞥されただけでも理解できるように、不動山を幅20m・奥行20mほど入り込んだ険しい崖となっており、また崖上は現状では平坦な通路を兼ねたテラス状の空閑地となっているが、水路となる溝の空間は充分にある。その崖下から滝口を仰ぎ見れば『増鏡』のいう「嶺よりおつる瀧のひひき」を想起させるに十分である。辞書を引くまでもなく嶺・峰とは山の頂きや山頂を指す。不動山中腹から崖となるその場所こそがそれにふさわしい。今回、中根氏のいう滝口から南方約100mで池跡を検出した。中根説のポイントは四十五尺の滝と不動堂がセットになっていることである。しかし、残念なことに、水の流れ行く池についての言及が無い点が中根説のネックになっていた。

従来の西園寺時代景観の復元する条件は池と滝であった。それが必要十分条件になるには四十五尺（13.5m）の滝の高さと不動堂と池の位置関係をクリアしなければならない。しかし、滝の「高さも丁度同じ程」といわれても「不動山の切り立ったような岩盤の崖」根元にあたる標高105.5mの「坪のような小広場」から、標高115.49mにある「岩の上部中央」まで高さは略10m

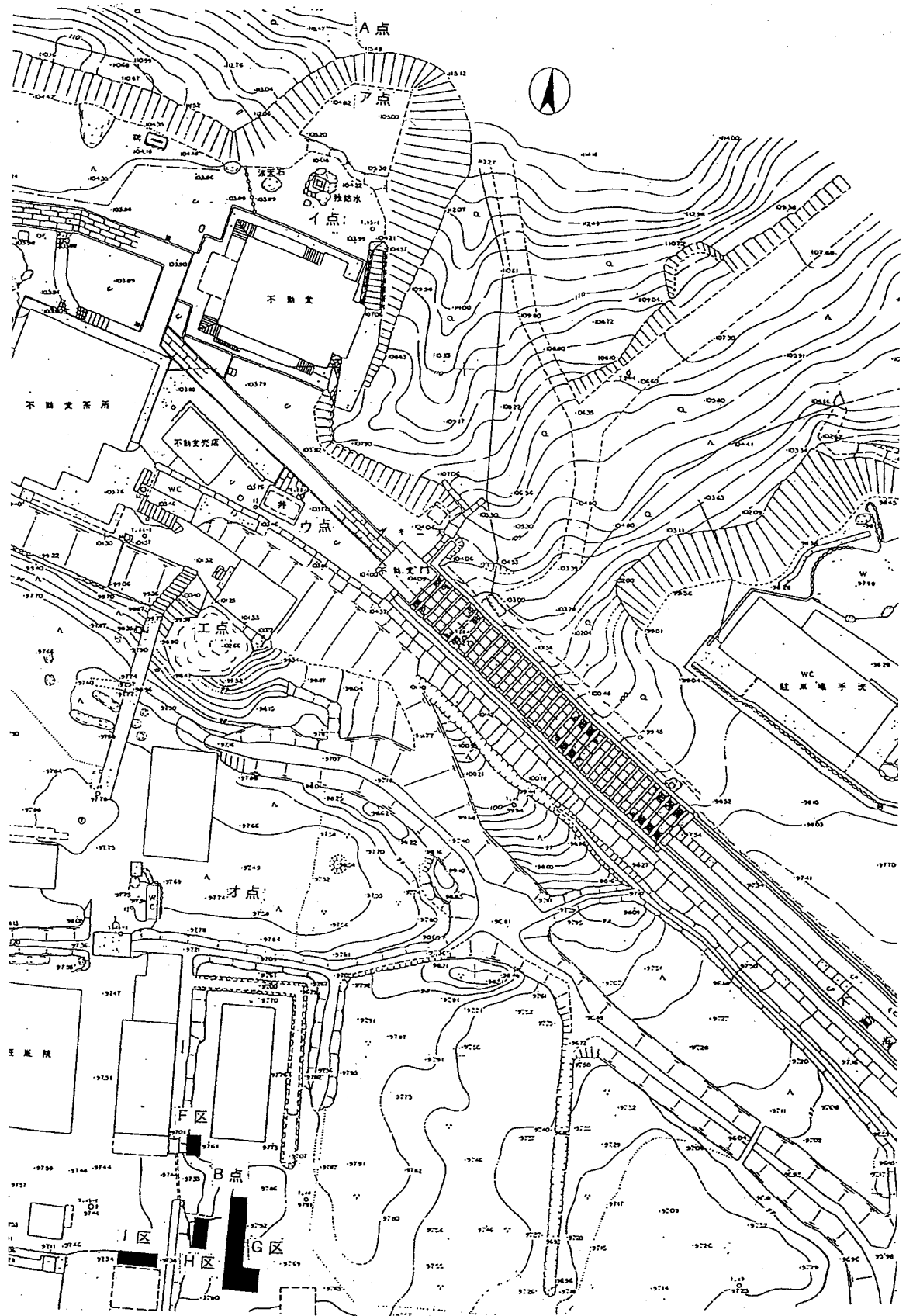


図6 第6次調査試掘調査区配置図 (1:500) 鹿苑寺作製地図に加筆

(三十三尺) しかない。しかもそこから南に不動堂を超えて平坦地が40mも続き、通路の南側にある高さ約5m(十五尺)の崖が土塀で遮られている以上、「坪のような小広場」から「岩の上部中央」を見上げる我々にとっては、どうしても「この岩盤が四十五尺の大滝跡で」「高さも丁度同じ程」である、とする中根氏の真意が理解できなかった。十二尺(3.6m)足りない。

仮に標高115.49mにある「岩の上部中央」を滝口の咽とし、「四十五尺瀑布瀧」の値が正しいとすれば標高102m地点が水落ちになるはずである。そこで通路の南側にある土塀で遮られた約5mの崖の下から「岩の上部中央」まで測り直せば、その崖の根元の現状地形が標高98mであるから、高低差約17.5mである。尺にして五十五尺を測り「四十五尺瀑布瀧」により近い値が得られる。その差は十尺(3m)であるが、その分高過ぎる。

中根説と滝・池・不動堂との関係

そこで観点を変えて図6を再び参照していただきたい。図6にある中根氏のいう滝口咽をA点とし、今回検出した池跡をB点として、そのA・B点間に補助線を引けば、その線上に他の場所にはない特異なポイントがいくつか浮かび上がってくる。池跡であるとするならば必ず水源があるはずである。また滝があれば池もある可能性が成立する。現地形では北に高く南に低い。

以前の調査済みの補助線以西に関しては、崖上の不動堂南西に隣接して茶所跡に設けた第5次調査Y区(図3参照)に西園寺時代の流水跡は無く、『報告書』を見れば、桃山時代に「南側の傾斜を埋め立てた整地土」(10頁)の他は、地山の岩盤が露出している。そしてさらに決定的なことは、ここでは「桃山時代と室町時代の遺構を第2面で検出し」(同頁)ているが、このY区第2面、南・東側が谷状に下がっている点にある。しかも、この「斜面を埋め立てた整地土」(同頁)から礎石状のものが検出され(『洛中洛外図』の写本のひとつである天文八年以降を描いたとされる東博模本に、茶所跡に懸崖造の建物が不動堂とは別に明確に南面して描かれており、それに比定できる可能性が高いと考えられたため。『報告書』75頁参照)したがって、地山まで掘り切っていないので桃山時代の「斜面を埋め立てた整地土」を簸せばさらに深くなるであろう。とすれば、このことは現地形にするために少なくとも桃山時代以前に谷状の上に盛り土をしたことになる。また土塀が立つ崖下に沿って設けた東西方向のトレンチ『報告書』E・F・W1区でも、今回検出した池跡の北西隅の可能性が高い「W1区東半」で検出された東に傾斜する「落ち込み」を除いて、水路跡は皆無である(『報告書』F区で南北方向の「溝48」を検出しているが、義満時代の面取した花崗岩製礎石が転がり落ちていたのでそれは無関係である)。従って、池跡の水源は崖より上は『報告書』Y区以東、崖下では「報告書W1区東半」以東にしぼられる。

崖上段で谷状に凹んでいる場所は中根氏のいう滝口咽A点付近のみである。

このA点からB点へ北から順に補助線上のポイントを落して説明を加えると、

A点に「不動堂の北側に接して、坪のような小広場」の北に面する「切り立ったような岩盤の崖」直下に、水落と思われる部分を挟んで2個のチャートが微かに頭を覗かせている。

イ点に「坪のような小広場」の「中央に獨鈷水と称する石組の井戸」（地表面の標高約104m）があること。そして、この井戸底がほぼ四十五尺の標高102mに近い値になる。

ウ点に不動堂南側の参拝通路とその南にある土塀との間に第2の石組井戸が補助線上にある。

エ点に崖の途中から東西7mの磐代と見間違えるような巨岩が南に7m突出して露頭している。

オ点は補助線上に掛かる東西方向の長いトレンチ『報告書』W2区西半の地山レベルがGL-1m以上あり、湧水があり下層が砂層であったこと。（『報告書』ではその実測図部分が省かれているが、それは遺構としては何も検出できなかったことと、配管レベル以下は掘らないという約束があったせいで、ますます池の可能性が高まる（写真4））。以上である。

獨鈷水と北隆石

ここで注目すべきことが二つある。

一つは地下水脈が補助線上にあるイ点の第1の「獨鈷水と称する石組の井戸」と、不動堂を超えて南にあるウ点の第2の石組井戸に繋がっている点にある。後者は現在蓋が被されポンプで汲み上げられているため深さ等は不明であるが、前者の「獨鈷水」は今も水が涌き出し、しかも、その井戸壁東西両底に滝の石組を利用したと思われる横1m以上のチャートの巨石2個が高さ1mほど露出し、その上に頭大の石を円形に積み上げ、コンクリートで固定して井戸壁を形成し、井戸壁構造が上下で異なっている。しかも、決定的なことはその井戸底がA点を基準にして測った四十五尺（標高102m）の値に近いのである。言い換えれば「獨鈷水」は滝の石組を用いた他に類例のない井戸だったのである（写真5）。

この「獨鈷水」は鹿苑寺を江戸時代始めに再興した鳳林章承の日記『隔菴記』正保二年（1645）十月十日の条に「石不動之庭獨鈷水之井邊之木栽替、大石共居直也、人足其外内之者十五六人也、玉蔵院亦被來于石不動也」とあり、すでにこの時代には存在していたことがわかる。それは一日の仕事であるから植栽と井戸枠となる大石を組み替えただけであろう。

また「獨鈷水」西40mに素掘りの井戸があるが、それは地山の岩盤を掘り抜いただけで井戸の様相がまったく異なっている（しかもその水は濁っていた）。もしそこが、埋め立てられていなかったとすれば後者の井戸同様、岩盤を掘り抜いただけの井戸になろう。

二つ目は、その延長上にあるエ点の巨岩についてである。この巨岩の頂点が標高102.66mである。先に仮定した本来在るべき条件である標高102mより0.6m高いだけで、巨岩の根元が現在で標高99mである。発掘できない以上、この巨岩が搬入されたものか自然の岩盤を削り出したものなのかは岩石専門家の調査を必要としよう。しかし、東西7m、南北7m、高さ3.6m以上の巨岩を作庭以外に現位置に移動させることは考えられないし、また一個だけの巨石がぽつんと崖から突出していること自体が異常である（写真6）。

この巨石に関して確定はできないが、次のように考えることも可能である。

元仁元年（1224）に営まれた西園寺落慶供養の次の年の正月には定家の見た四十五尺の滝が作

られていた。しかし、この落慶供養だけで造営が完了したわけではなく、その後も引き続き進められたことは『明月記』が伝えている通りである。

元仁二年二月八日、天晴、午時許中将来、昨日參北山、近日每人被宛桜木、栽前庭云々、

寛喜元年六月九日、(乙巳) 朝天雲漸晴、午時雨降、(中略) 午時許心寂房来臨、示合老病事、傳聞、自春比巷説、頻稱石、(北隆石云々、日来在相坂方、雜人云、此石有靈、依歸郷以風雨常不止云々、相國運取其石、被引北山云々、) 一日此牛十七頭被引取了云々、又云、其石有穴、似獅子頭云々、春比疾病又稱石病、定又虚言歟、

十一月十九日、(癸未) 天晴、巳時許參殿、中納言候御前、相國被仰之間也、(中略) 少時相國出給行北山、立石由被申、

つまり、元仁二年(1225) 二月には前庭に桜を植えることを家臣に命じ、先に引用した通り同年の嘉禄元年(1225) 十月に不動堂を建てている。そしてなによりも重要なことだが寛嘉元年(1229) 六月九日には、靈石とやかましく噂されていた「北隆石」(ただし今川文雄氏はその割注を「此の隆石」と読まれて「此れ隆石と。日来相坂の方に在り。雜人云ふ、(「此の石は靈有り。卿に帰するに依り、以て風雨常に止まずと。相國其の石を運び取り此の山に引かると。一日の比、牛十七頭を以て引き取られんぬ云々。)」と訓まれている(『訓読明月記・第五卷』1978年、32頁、北を此、郷を卿に写していることは明治44年発行の国書刊行会版もほぼ同じ。筆者は『名勝調査報告第二輯・金閣寺(鹿苑寺)庭園』から引用した。他の『明月記』からの引用は国書刊行会版からである。しかし、文献史学の赤松氏もそうだが庭園史家はすべて「北隆石」と読んでいる)。大石を、「相坂方」から牛十七頭に引かせて北山第に運び入れ、十一月十九日に公経自身が北山第に出掛けて石立にとりかかったという記事である。

ここでいう落慶供養から四年目にして牛十七頭に引かせた靈石「北隆石」こそが、エ点の巨岩ではなからうか。問題を解くカギはこの巨岩の解釈にかかっているといえよう。真ん中に凹みがあり、全体の形が獅子舞の「獅子頭」にかなり似ている。金閣寺境内をくまなく徘徊したがこの巨岩以上の岩は、そして、それが可能か不可能かは別にして、現実に牛十七頭を運搬のために必要とする岩は私が知る限り存在しないのである。池の北側に隆起している故に「北隆石」の名はふさわしいと思う。また「相坂方」は「相坂方」から飛来してきたのであれば話は別であるが、そうでなければ滋賀県との境にある遭坂ではなく、現鏡石町付近の旧字名「赤坂」又はその先の「長坂」付近を指すのではなからうか。なぜならば、そこは鏡石や不動石等の靈石の産地であり、また相坂から一日にしてこの巨石を運ぶには遠すぎるからである。そして、もしそうだとすれば金閣寺門前通りである鏡石道を利用して北から南に向かって坂に沿って修羅を用いて牛十七頭で一気に引き下ろしていけば、一日にして簡単に現位置に滑りこめさせることができるかもしれない。石の質も鏡石とよく似ているようにも思われる。いずれにせよ親切な注釈のついた『明月記』の刊行本が待たれる。古文書学的吟味と技術的・力学的計算が必要とされよう。

なお『山州名跡志』の「石不動堂」の項に「渡天石 有^レ堂^ノ南^ニ」とあるが、今日では堂の南を見渡しても石畳の通路とウ点の井戸と土塀が見えるだけで、「渡天石」と呼ばれるような石は

一切存在しない。図2にあるようにいつの間にか堂の北東部に移動している。「渡天石 有_二堂南_一」こそはここでいう「北隆石」あるいは「此隆石」のことではなかったか。比較的正確に書かれていると思われる東博模本『洛中洛外図』には土塀はない。いつから土塀で不動堂が囲われたのかは知らないが、土塀さえなければ「堂南」にエ点の巨岩が見えたはずである。現在の渡天石ではとても『山州名跡志』に載るような名石とは考えられなからである。

筆者は長年、庭師として鹿苑寺庭園の補修・整備を指導されている樋口造園の金根氏に問うてみた。すると次のような答えが返ってきた。すなわち「この岩は最高の岩です。この岩を庭師が見逃す筈はない。私は昔からこの岩を滝口だと思っていました。」と折り紙を付けられた。

日本最大の人工滝

もしそうであるならば、四十五尺の滝でいったん水を落とし、現不動堂の下に遣水または溪流として流し、さらにこの巨石「北隆石」から水を池に落としたりとも考えられる。『増鏡』にある「石橋の上には五たい堂」もア点の滝壺からエ点の巨石までの約56mの間のどこかに「石橋」がかかり、この「石橋」の上にあたるY区北側崖下部分付近に小さな「五大堂」が南面して存在した可能性も考えられる。

確かにこの崖の南側に立ってこの巨岩を仰ぎ見れば水落と思われる凹みが岩中央に伺え天竜寺の石組をはるかに超える。ただし、この巨岩を滝の石組と見るか景石と見るかは今後の課題であ

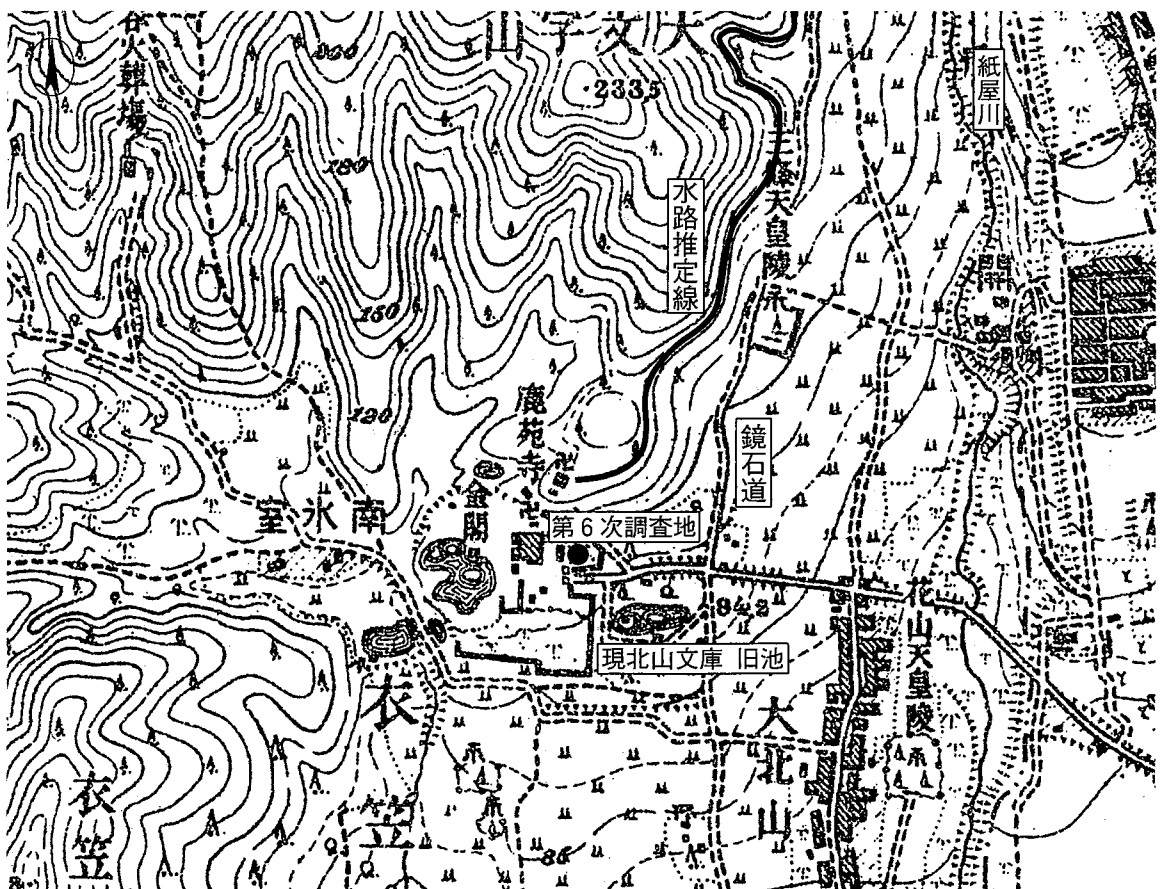


図7 明治時代の地図に加筆（1：10,000）

ろう。

久恒氏が『増鏡』の記事から「船上の、低い視線から滝が見えたことは鎌倉時代の滝が石不動の辺りにあったのではなく、やはりこの鏡湖池の前身である大池に近く落ちていたものと思われる。」と解釈されたがそれとは逆に、今回検出した池跡から北に向かって不動堂を見れば、土堀と不動堂によって遮られているが、それがなければ十分に巨大な滝が真正面に見えるはずである。したがって検出した池跡から「船上の、低い視線から滝が見えたことは鎌倉時代の滝が石不動の辺りにあった」と解釈しても間違いとはいえないであろう。

中根氏が調査されたように「滝口の岩盤上部の窪みから、不動山およびその後方の山々の山腹や山麓を通り、約二キロ北方の鷹峰山裾を流れる紙屋川の上流に至っていた。」のであれば、安民沢→鏡湖池→という水流とは別に、西園寺時代には不動堂北にある崖を滝口とした「紙屋川」→「瀑布滝」→「瑠璃池」→というもう一つの水流が在ったと理解しなければならない。さらに明治時代の地図（金閣寺庭園が報告されている『名勝調査報告・第二輯』1935年に収録された陸地測量部二万分一地形図、図7参照）によれば、今回検出した池跡東南方向に存在する北山文庫付近にかなり大きな中島を持つ池が記録されている。そして現に北山文庫北東に小さな池（図一参照）がその痕跡として残っているのである。もし、その池にまで広がっているのであれば現在の鏡湖池をしのぐ大池となろう。また今回検出した池と現在の鏡湖池がどこかでつながっていた可能性も捨て切れない。もしそうであるならば凹形の池のプランとなろう。

このように読み込んでみると補助線上に表れた全ての事象が説明出来る。即ち『明月記』の「四十五尺瀑布瀧」はA地点の崖とエ点の巨岩を含む、少なくとも2段以上（その内の第1段は13m以上の高さを誇る）の水落を持ち、長さ約56m、現在露出している巨岩の根から測れば高さ約16.50m（五十五尺）の日本庭園史上最大の大滝であり、露頭している巨岩と井戸底を基準点に置けば測点によって多少異なるが、定家の云う四十五尺は、当たらずとも遠からずといえよう。

滝が埋まった時期は特定できないが少なくとも宇喜多秀家が天正年間（1573～1592年）に再建したといわれる現石不動堂や参拝通路等はこの谷間の上に作られたことは間違いないであろう。池の埋まった時期は筆者は砂層の堆積から西園寺の没落が始まった公宗が処刑された建武二年以降から義満が造営を開始するころには相当砂で埋まってでいたものと考えますが、砂層を覆う第2層の整地層から義満時代の瓦の破片を検出しているので、義満時代も機能していた可能性がないとも言い切れない。また、砂層自体が洲浜を作り出すために白砂を敷いた可能性もあり、今後の問題点として残しておきたい。

とはいえ、川勝氏が前記の論文で述べられたように、少なくとも15世紀半ばまでには既に「岩屋僧」「岩屋不動」（『管見記』永享五年（1433）六月十一日、嘉吉二年（1442）九月二十九日条）と呼ばれ、現状どうりの標高地点に巖窟に祭られ、この岩不動が広く貴賤の間で信仰されていたであろう。

この滝跡が西園寺時代のものとするならば『増鏡』の「峯よりおつる瀧」「たきのもとには不動尊」という記述どうり、滝が埋め立てられる前から不動堂が滝水落際の近辺にあった可能性が

高い。不動尊の製作年代および不動尊が安置された巖窟が当初よりあったのかについては、より正確な調査を必要とする。滝が埋まった後、現在の高さで巖窟を掘って本尊の不動尊を祭直したという解釈も成り立つ。また、『増鏡』の「峯よりおつる瀧」「たきのもとには不動尊」の文間にある「池のほとりに妙音堂」という記述も、今回検出した池跡から現北山文庫付近にかけて「妙音堂」が存在したことを想定させ、『明月記』の「瑠璃池」の一部である可能性が高まった。この池跡は以前の調査を含めて勘案すると安民沢と同じかそれ以上の規模になろう。鈴木久男氏によれば、安民沢のような上段の池から高低差を以て滝を造り大池に流す貯水池的利用方法が平安後期の法金剛院・毛越寺にあると教えられた。しかしそれらはいずれも小さく安民沢の規模を持たない。このような方法がいつから始まったのかは今後の研究に待つしかないが、重要な論点であると考えられる。従来は新鮮で汚れのない湧水や川から水を引いてくるのが普通である。中根氏が云われるように紙屋川から引いてきたとすれば、それは寧ろオーソドックスな方法だと云えるであろう。紙屋川上流はかつて七瀬の一つだと云われている。そこから水を引くことは意味あることだったと思われる。水源の違いから今回検出した池跡の堆積層が腐植土ではなく、砂層であることから定家がいった「瑠璃池水、又泉石之清澄、実無比類」が素直に理解出来るのである。『室町時代庭園史』（1934年）を著された外山英策氏が先にあげた定家の記録と比較して「これに比して、今の金閣の池水はあまりに不潔に過ぎる嫌ひがある。」（507頁）と看破されたのは、けだし卓見である。

岩窟寺院としての北山石不動堂

久恒氏は「鹿苑寺の庭」について「公経は夢によって北山に西園寺を建てた。公経の夢は『源氏物語』の『若紫』の巻にあった。源氏が瘡病を呪いに北山のある寺に行き、その僧坊で紫の上を初めて見る場面があるが、その架空の寺が公経の夢であった。公経は『源氏』の舞台を夢見、それを理想とし、北山山荘の北部にある寝殿に住居した。『若紫』の巻に『寺の様もいと哀れなり。峯高く、深き巖の中にぞ、聖入り居たりける』とある記述は、今の『石不動』の迎りをすぐ想起させる。」（前掲書233頁）と自説と少し異なる感想を述べておられるが、筆者も同感である。外山氏が力説されたように、文学が庭を作り、又、庭が文学を作るのである。

定家もまた『明月記』嘉禄元年十二月五日に「日出之後、出門向北山勝地之間、（中略）参堂前暫眺望、又曆覽所々、旁催興、如入仙窟」と感想を述べている。

しかし、池から滝が見えるとなると、不動堂がそこにあると邪魔になる。その点はどのように解釈すればよいのだろうか。

この不動堂について川勝氏は「北山石不動が、既に室町時代に信仰された古像であることや、土蔵風な入口を設けた岩窟内に奉安されていることなどが知られているのであるが、近代にこれが調査研究されたことを聞かない。」とされ自ら調査された。本尊石不動明王は不動堂にあるのではなく、その奥に巖を横穴に掘った岩窟内に安置してあるのである。

川勝氏の調査によれば「不動堂内奥の岩窟入口は『名跡志』に記されているように土蔵風に作

られ、両開きの扉も白壁塗である。その左右にはどう見ても古い庭の石組の材料であったと思われる立派な青石が立っており、石室内に入ると左右奥の三方は同様な青石を多数積み上げて石室が構成されている。その積み方はむしろ乱雑稚拙であって古い構築とは思われないが、青石自体は素晴らしい材料である。『名跡志』に『又昔ノ瀧ノ跡此堂後ニアリ』と見えるが、不動堂の北から東は山になっていて、そこに瀧の石組を取り去った痕とも見えるような荒々しい傾斜面がある。岩窟に用いられた青石は、あるいはそうした古い瀧組に用いられていた材料を流用したものではないかと思われる。石材から受ける感じは全く鎌倉・室町時代の庭園材料と見るにふさわしい。…岩窟内は幅八尺、奥行十尺、高さ七尺の広さで、その中央奥に迦樓羅炎を現した大きい長方形の石造光背を立て、前に石造不動明王立像が安置される。この光背は後補と思われる。不動明王は緻密な砂岩を丸彫したもので、高さ五尺四寸の等身像である。」(前掲書2～4頁)とされている。であるならば、現不動堂は後に付け加えられた単なる拝殿にすぎないのである。

筆者もお寺の好意によって本尊石不動を一度拝見させていただいたが岩窟内は異様であった。但し、川勝氏の言う青石が瀧の転用材とは私には思えなかった。したがって、岩窟が本体でそれに雨や滝の水を凌ぐだけの懸崖造の不動堂であったならば、公経の夢みた『源氏物語』の『寺の様もいと哀れなり。峯高く、深き巖の中にぞ、聖入り居たりける』とある記述と、『増鏡』の「とをきさかいにのぞめる心ちにするに。めぐれる山のたきつ岩ね。はるかにかすみで見出さるゝ程。仙人の洞もかくやとぞおぼゆる。」という記述がそのまま当てはまり興味深い。

したがって『明月記』に記された不動堂も、三仏寺奥院(投入堂)や龍岩寺奥院礼堂と同様に、この岩窟に簡単な屋根を差し掛けただけの祠風の簡単で小さな懸崖造の不動堂だったのかもしれない。でなければ瀧の雄大さが表現できなし、また池から瀧を仰ぎ見ることも不可能になってしまうからである。それだけではなくて、西園寺造営以前からこの岩窟は存在したのかもしれない。この地域は別名「岩陰」と呼ばれてきたからである。

熊野那智の瀧と西園寺四十五尺の瀧

以上述べてきたように今回の調査によって微かながらも西園寺時代の景観復元の手掛かりを得たと思う。勿論、これは手掛かりに過ぎず、前田義明氏が『報告書』で述べられたように「中根金作氏のいわれる不動堂の裏にある瀧にしても、導水路や滝壺などを発掘調査しなければ確定はできない」(『報告書』89頁) ことには違いがない。しかし、定家が見た四十五尺の大瀧は現在ある「龍門瀑」ではなく、久恒氏の想定通り第2次調査で「縦目峰」西斜面で検出したJ区「石組17」か、中根説かのどちらかに絞られるであろう。このお二人の説は庭園史・造園関係の著作も多く、金閣寺庭園整備・調査に深くかかわってこられただけに説得力がある。とはいえ、庭池に二カ所の瀧ないし流入口があったとしても一向にかまわないのであって、夢窓疎石作庭なる南北朝時代の天龍寺庭園の場合、調査された中根氏によれば、かつては「瀧から水を落とし(築山後方の山腹噴泉より木樋で水を引いた)、また小倉山麓の池から水を引いて(現在は、国鉄山陰線で切断される)瀧口横に流していた」(『庭』1973年、87頁)のであって、二カ所の流入口は水利

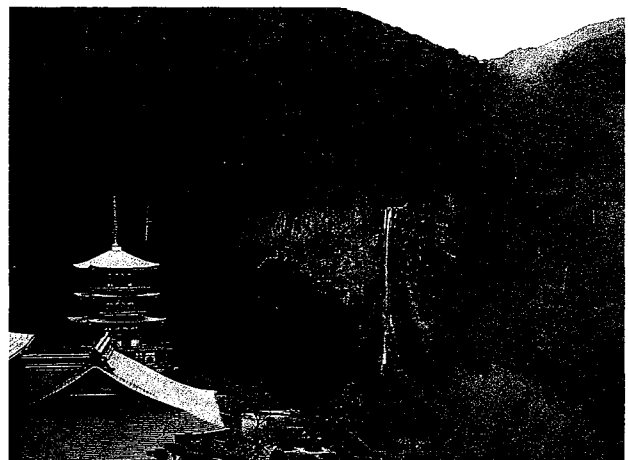
制御上からも都合がよく、金閣寺の場合（現在では瀧のほかにポンプで鏡湖池の水位制御を図っている）も、かつてそのようなことがあったのかもしれない。この問題も今後の研究に待つ。しかし、後者の仮説（或は伝説）がもし正しければ、今日まで云々されているいわゆる浄土式庭園、あるいは院政期から鎌倉時代にかけての庭園の概念を転換させることになるだろう。この時期に眺望を求めて山荘が多く営まれるようになるが、水源の問題さえ解決できれば、このような形式の大瀧は必然的であるともいえる。「平安後期になると那智の瀧や布引の瀧が知られるようになる。したがって高い瀧を落としてみたいという願いはあった。一方市中が開け人家が増え、平安京北部の森林は次第に伐採されて、地下水が次第に涸れ、市中の繁華をさけて景勝の地を求めて山麓に山荘別荘が建てられるようになる段階では、高い瀧を落とすことも可能になる」（西沢文隆、前掲書、200頁）。しかし、それにもかかわらず、このような瀧は今のところ他に類例がなくスケールが違いすぎるのである。

定家が「見勝地景趣、体新仏尊容、毎事以今案被営作、毎物珍重」と記していることは注目されてよい。既成の概念で見ることは見るべきものを見逃す恐れがある。『増鏡』に造営の様を「さらにうちかへし、くつして、えんなるそのにつくりなし」とあるように、不動山を掘り崩し山の高低差を利用した瀧として注目に値するであろう。そしてもしそうだとすれば庭園の人工の瀧としては日本一の規模を持つことになるだろう。

日本一の瀧といえども勿論、高さ135mの那智の瀧であるが、法皇はもとより上皇・女院・公卿などの熊野御幸・熊野詣が最盛期であった鎌倉時代のこと。公経の夢は『源氏物語』や白氏の漢詩で表現された中国天台山に加えて、那智の瀧を切り取ってこの北山に貼り付けたかったのかもしれない。（例えば、鎌倉時代に限っても後白河上皇34回、後鳥羽上皇28回、後嵯峨上皇3回、龜山上皇1回等である。また鎌倉から北条政子も2回参拝している。）人は誰も頭の中にある設計図なしには、何も作ることはできないし、又、その元になるものがなければ設計図さえも作れないのである。しかしそれができるのが人間であり、この本質から展開することが人間の学としての考古学の基本となることは言うまでもない、全ての遺物・遺構は歴史的・社会的に形成されてきた人間の精神・身体の前延である。この本質が考古学の基本となることは言うまでもない。

事実、公経は知られているだけでも2回ある。それは公経自筆『熊野懐紙』と定家の自筆本『熊野道之間愚記』の实在によって知ることができるからである。

上横手雅敬氏の「後鳥羽上皇の政治と文学」によれば「正治二年十一月、上皇は通算三度目の熊野御幸を行った。上皇が御幸の途次に催した歌会の際に書かれた熊野懐紙によって、源道親・西園寺公経・藤原範光・同長房・源家長・藤原家隆・同雅経・



熊野那智の瀧（吉村正親氏撮影）

源具親・寂蓮・藤原隆実・源季影の十一名の詠草が確認される。……翌建仁元年十月には、四度目の熊野御幸が行われた。正治二、建仁元年両度の熊野御幸は、和歌史上重要な意義を持つもので、建仁元年には藤原定家も供奉し、『熊野道之間愚記』と称する詳細な記録を残している。『明月記』の八月九日条によれば、共人は源通親・坊門信清・藤原仲経・同保家・同定家・坊門隆清・藤原親兼・同長房・坊門忠信・源有雅であるが、『熊野道之間愚記』の十月五日条によって西園寺公経・藤原範光・久我通光・土御門定通・花山院忠経・中院通方・七日条によって藤原信綱・源家長・藤原清範らも参加していたことがわかる。』（『古代、中世の政治と文化』1994年収録、622～623頁）

したがって、後鳥羽上皇熊野御幸が28回（承元四年（1210）の順徳天皇への譲位から鳥流しされた承久三年の乱（1221）まで院政期は11年しかなく1年に2回以上、後鳥羽上皇は熊野御幸した計算になる）を数える以上、公経が供奉した回数はさらに多くなる（公経が2回連続して参加していることから、特別な事情がない限り毎回供奉した可能性も高い）ことは必定である。まだ参議権中将で藤原を名乗っていた若き日の公経も例外なく那智の滝を自らの目で見るとその雄渾さと神秘性に圧倒されたことだろう。

那智の滝と那智川と那智川から流れ出る熊野灘は熊野那智山曼陀羅の永遠のテーマである。この極楽浄土と常世の國を表すテーマが公経の頭にこびりついたことは想像に難くない。なぜならば北山の滝も同じく崖上から水が落ちてくるからであり、長い水落ちは、あまりにも那智の滝に似ているからである。那智の滝のちょうど十分の一の西園寺四十五尺の大滝は石組を本質的には必要としない。13.5mのほぼ垂直に布落ちする崖で十分なのである。したがって、石組みは滝壺にのみ必要とされ、それは現在埋まっていると考えることができる。ア点に頭をのぞかせているチャートの石や、イ点の「独鉈水」井戸底にある巨岩（これもチャートである）がそれであろう。「国々の名所をおもいめくらし、おもしろき所々を、わかものになして、おほすかたを、そのところになすらへて、やはらけつへき也」と『作庭記』の著者は云う。

この時代の作庭の要諦は諸国の名勝を写し撮ることなのである。文学が作庭に深く関わるのもこの点にある。考え過ぎだと言われるかもしれないが、ア点からエ点までの56mの遣水は那智川に該当し、それには石橋がかかっていた。今回検出した池跡も『増鏡』で「池の心ゆたかに、わたつ海をたたへ」と記述されているように、補陀落渡海の道筋を示す那智の海を写し撮ることにあったのかもしれない。補陀落渡海の目的地は言うまでもなく蓬莱山を表す中島であるが現地形からは確認できない。那智の滝の右側山にはかつて不動堂があったとされている。したがって大山氏が「滝とは読んで字の如く、水が岩伝いに泡立ちながら滝のように曲がりくねって流れ落ちる場合に用いる。これに対して那智や華巖のように垂直に暴々しく落ちる形式を、正確には瀑という。定家卿が北山第で見たのは垂直落下式ではなく、布を流れに曝すように岩肌を伝い落ちる和様の滝である。」（前掲書64頁）とされたのは、あまりにも語句にとらわれ過ぎた発想ではなからうか。

逆修の場としての西園寺

公経は西園寺をこの北山に建立したのであり、それは極楽浄土への成仏を願ってのことであった。樋口清之氏の適切な表現を借りれば、当時の貴族は「死への予行演習」のために、このような別業を必要としたからである。

「嘉禄三年（1227）に公経の妻全子は痢病が原因で死んだが、発病以来一月を経過した七月二十七日に、死ぬ時は西園寺に行きたいとの病人の希望に基づいて、西園寺に移り（明月記嘉禄三、七、廿六）、同じく病人の所望によって当時評判の高かった明恵上人を招いて、出家し、西方の山葉を見て、極楽を観念し、臨終の作法を営んだ（明月記嘉禄三、七、廿八）。全子は八月七日に死に、その夜、瀧の東北方にある山に葬られた。公経は仁治元年（1240）七月廿日から、西園寺で逆修と云って、生前に死後の仏事を豫修することを三七ヶ日に亘って盛大に行い（平戸記仁治元、七、廿）人を驚かせたが、寛元二年（1244）八月二十九日に死ぬ直前に、二十五日を以て北山第に移り、そこで死んだ。」（『鹿苑』14頁）

このような時代背景を考えれば生と死の世界が交わる熊野三山の世界と中国天台山の世界を北山の滝に持ち込んだとする筆者の考えも決して荒唐無稽ではないであろう。

なお『報告書』で「不動堂の東方から斜面を登ったところでは平安時代中期の灰釉陶器壺が工事中に出土した。壺だけが単独に出土し、遺構は明らかではない。」（11頁）としたものについても、時代は降るが、『明月記』嘉禄三年（1227）八月八日の条に「今日聞、夜前葬送了云々、堂東山、（瀧良方云々）」とあることから興味深い。この定家の記述は筆者が述べてきた瀧と不動堂と不動山の位置関係をより雄弁に物語っているのではあるまいか。すなわち、この記述は西園寺境内での話であり、西園寺東に位置する「堂東山」は不動堂と今日いう不動山のことであり、瀧とはいうまでもなく四十五尺の瀧のことである。

『中世の葬送・墓制』（1991年）を著された水藤真氏によれば『玉葉』でも『明月記』でも『師守記』でも葬送は死後あまり時を経ず行われており、「葬送」の語は土葬とか火葬とか遺体の処理そのものを指している。（19頁）のであり、その日のうちに葬送されていることは、彼女が日常生活の場であった邸宅から西園寺に移り、そこで出家・逆修し、臨終に際して準備万端の態勢をしていたからだと思われる。水藤氏が「出家と逆修」の項で「信濃守藤原永清が、永長元年（1096）四月十八日に亡くなったときもやはり直前に出家を遂げていた。かつこのときは同時に寺に移ったらしい。それはやはり厚葬を避けるためと、墳墓の地に近い方が葬送に便利であったという理由であった。」（71頁）と述べておられるが、西園寺の場合も全く同様であり、骨壺が堂内に安置されたか埋葬されたか、いずれにせよ生の煩惱を断つとされる不動明王を安置する不動堂と瀧、とその近辺の山辺であったことは当時の葬送儀礼を解明する上で興味深い。

むすびにかえて

西園寺家の経済的・政治的基盤については赤松氏の『鹿苑』に詳しいが、近年、網野善彦氏が

『続・日本の歴史をよみなおす』（1996年）において西園寺の所領とその分布を取り上げられ、それが海上の支配権に結び付いていたこと、そして、その支配権を梃子にして宋との交易を独占できた点を明らかにされ、再び注目されるようになってきた。この経済的・政治的独占権を握ってこそこの庭園は成立することができたのである。西園寺造営中のことであるが、赤松氏が論じられたように、鎌倉幕府が「貿易にどれほど積極的であったか、不明である。そのなかで、西園寺家が対宋貿易を積極的に行っていたことは、特に注目される。公経は、檜を以って三間四面の殿舎を一棟造り、それを解体して、宋に輸出したところ、宋帝が喜んで、多くの寶を公経に贈った。公経が仕立てた渡来船は、仁治三年（1242）の夏に日本に帰ったが、宋から銅錢十萬貫を始め、能言鳥・水牛などの珍しいものを積んでいた（故品記仁治三．七．四）。西園寺家が貿易で多くの利益を得ていたことは、この一事で知られるであろう。」（前掲書13頁）という点は今後もっと論じられてよい研究テーマであろう。一貫が千文であるから、十萬貫は一億枚の銅貨を一回の交易で輸入したことになる。公武一体化を図った武士化する貴族西園寺、貴族化する武士足利家。偶然とはいえ時代の流れの交差する一点がいま問題にしているこの北山の地なのである。この点は続編の『北山七重大塔』に繋がる政治史・経済史を貫く導きの赤糸なのである。上下に分けて一本とした所以である。

金閣寺拝観道出口に位置する不動堂北の窪みは拝観者にほとんど注目されることなく、忘却だけが通り過ぎていくようである。現状では滝についての明示・立札等は一切ない。中根氏が昭和31年当時に実測された水脈の溝は、宅地造成等のため今日ではそれを復元・追証することはほとんど困難である。しかしながら幸いにも池跡を検出したトレンチ以東は築地塀で画された広大な竹林であり、近世以降の厚い盛り土によって良好に保護されている。石不動堂の北側周辺および今回検出した池汀の範囲を電気探査等で確認し石組・池の確認と保護を図る必要があるように思われる。

「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔（下）」に続く



写真1 池跡断面



写真2 洲浜（西から）

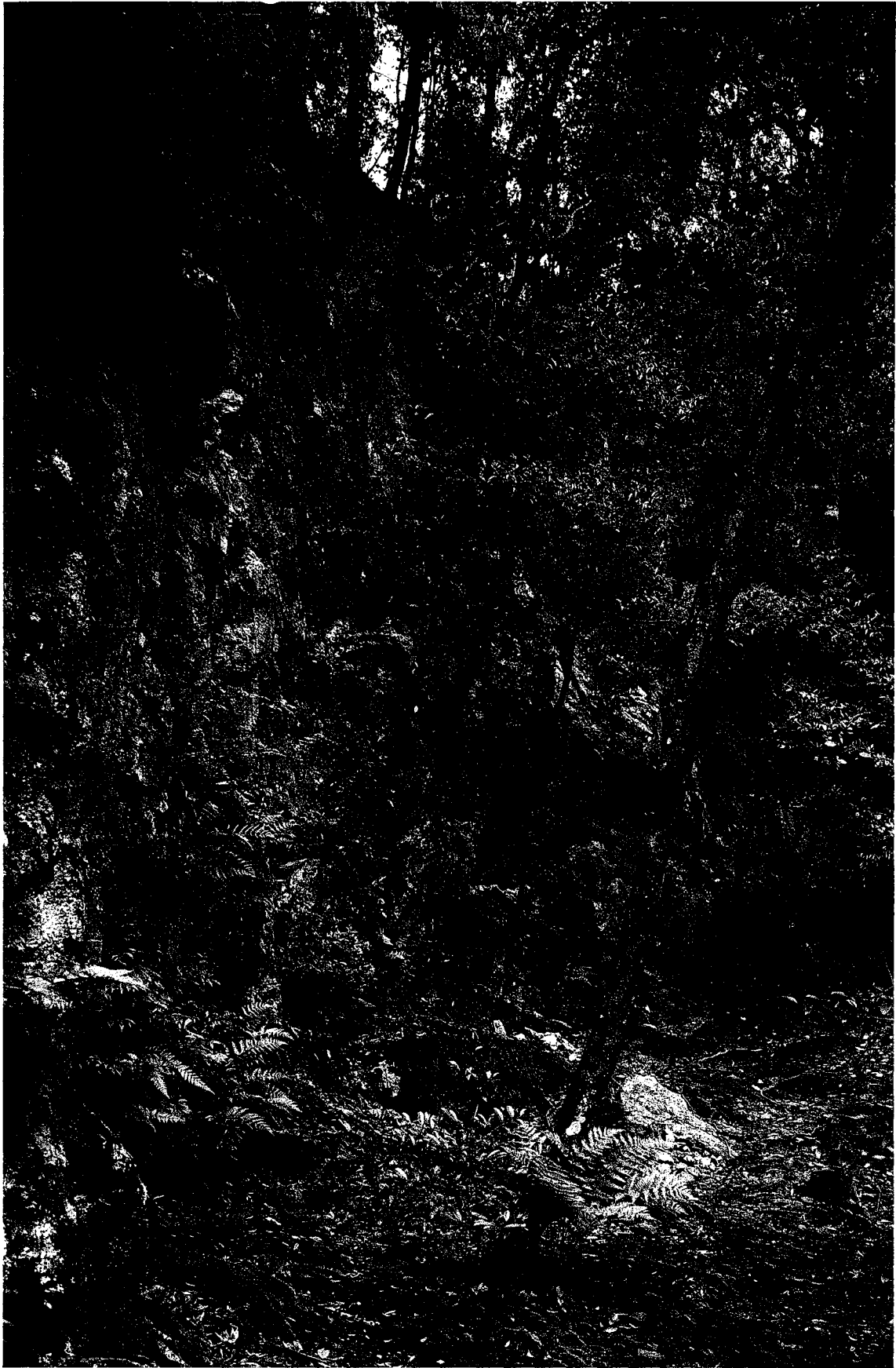


写真3 大滝



写真4 W2区池状（西から）



写真5 獨鈷水見入

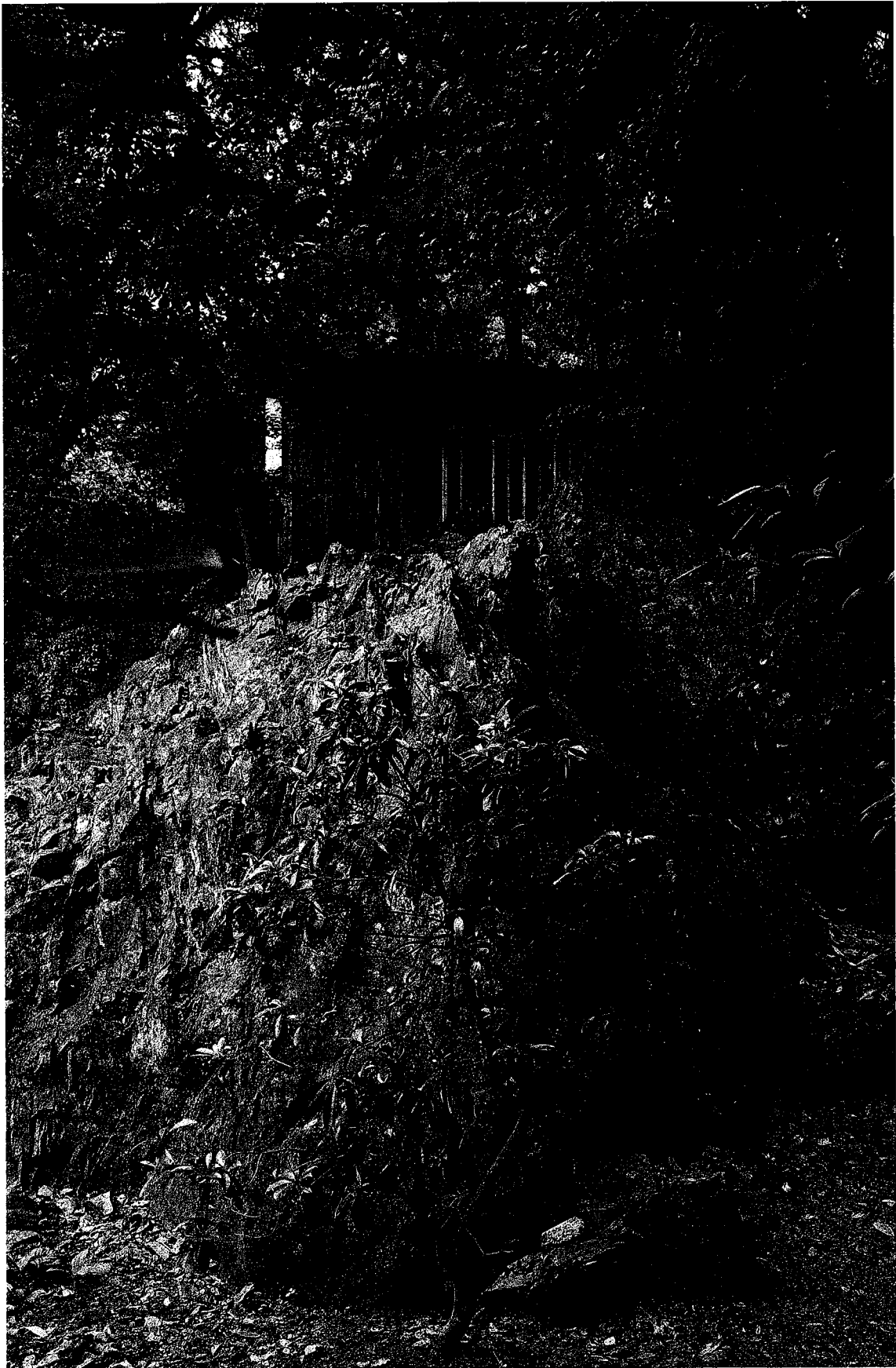


写真6 巨岩